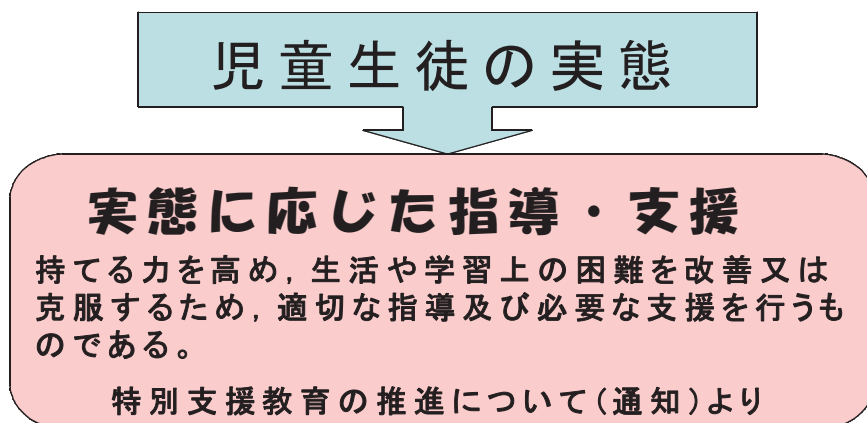


個別の指導計画の作成について

1 個別の指導計画とは…？

- 児童・生徒一人一人の障害の状態や発達段階などの的確な把握に基づいて、具体的な目標や指導内容、指導方法、評価の観点を明確し、それを具体的に明示したものです。

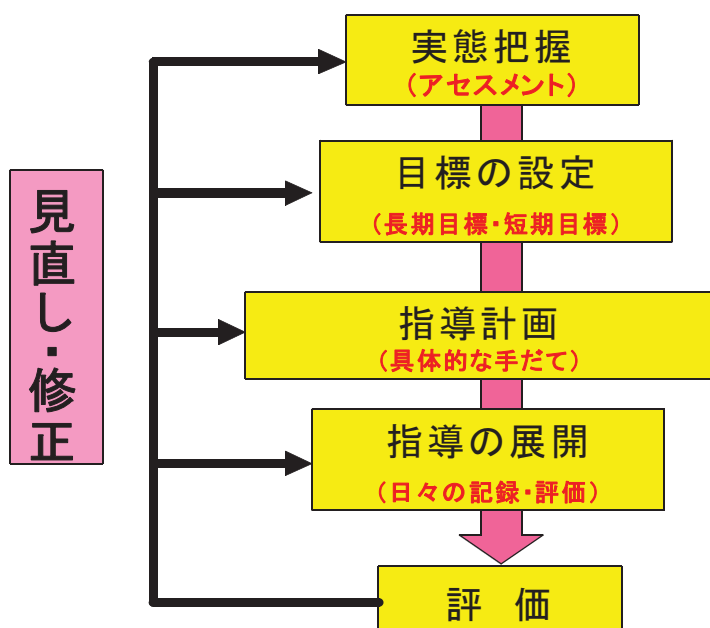


実態に応じた指導・支援をおこなうためには **計画**が不可欠



2 個別の指導計画 作成の手順

個別の指導計画作成の手順



※ 一連のサイクルとして機能することが重要です

(1) 実態把握（アセスメント）

- 子どもの現在の状態（つまづいている課題や習得しているスキル）、子どもや保護者のニーズなど、あらゆる角度から情報を集めます。

【実態把握のポイント】

- ① つまづいている領域・課題を発見する
- ② どこまで習得しているか把握する
- ③ 強いところ・得意なところを発見する
- ④ 課題を遂行しているときの子どもの様子を把握する
- ⑤ つまづいている要因を推定する
- ⑥ どこで支援を必要としているかを把握する
- ⑦ 本人のニーズを把握する
- ⑧ 家族のニーズを把握する

どこまでできているのか
どこにつまづいているのか
できる力はあるのか
機能面の問題はあるのか
誤学習しているところはないか



○ 実態把握のためのツール

- ・ 保護者からの情報（生育歴、生活環境、保護者の願いなど）
- ・ 行動観察、チェックリスト、諸検査の記録
- ・ 前年度までの記録など

(2) 目標の設定（長期目標）

- 収集した情報をもとにして、どういうことをめざしたいか、大まかな目標の方向性を決めます。

【目標の設定でのポイント】

- ① 目標の優先順位を決める
- ② 基本的なつまづきからアプローチする
- ③ 約1年間をスパンとし、1年後を見通して設定する
- ④ 日常生活・社会自立といったことを考慮する
- ⑤ 本人や家族のニーズを考慮する
- ⑥ たてた目標について他の人の意見を聞く

(3) 目標の設定（短期目標）

○ 長期目標の達成に向けて、より具体的な行動目標と手だてを設定します。

【目標の設定でのポイント】

- ① 学期や月など短いスパンでたてる
- ② 子ども主体の目標である
- ③ 肯定的な目標である
- ④ ひとつの目標はひとつの要素にしばられている
- ⑤ 観察や評価（○×）が可能な目標である
- ⑥ 条件や基準が示されている
- ⑦ 子どもの強い力を利用できる
- ⑧ 手だての量が適切である

目標設定のコツ

目標を設定するときには、表記も含めて3つのコツがあります。

〈子どもが〉 何をする	〈指導者が〉 どんな条件で	どの程度
行動の用語 で 記述する (具体的に)	・場面 ・教材 ・どんな支援	・回数 ・持続時間 ・達成基準

★子どもが何をする★

行動の用語を使うことで、具体的でわかりやすく評価がしやすくなります。



選ぶ 分ける 言う 話す
答える 書く 切る はる
取り組む 発表する・・・

具体性が高いため、
記述どおりの活動が
見られれば目標達成
と評価する。

～がわかる ～を意識する ～に気づく
～知る ～考える ～関心をもつ
～思い出す ～楽しむ ～味わう・・・

抽象性が高いため、評価が困難。
具体的な手だてや評価の視点を明確
にすることで評価が可能になる。

〈例〉 ✕ 色を区別することができる （行動の用語ではあるけれど・・・）



色を区別するとは、どんなことができたとき、達成できたと評価するのか？



「赤はどれ？」といわれて、指さすことができる。

（より具体的で、誰もが同じように評価することができる）



ていねい、きちんと、しっかり・・・



どんな状態をさすのか、どうやって評価するのか？

★どんな条件のもとで★

指導者の援助の方法を、「**身体的援助**」「**視覚的援助**」「**言語的援助**」「**その他の援助**」に分けました。

【身体的援助】

- ・ ひじをもって導くと
- ・ 手首をもって導くと
- ・ 手を添えて靴下をつま先までもっていくと
- ・ バケツをもたせ、持ち手を上から押さえて支えると など

【視覚的援助】

- ・ 点線を目印にして
- ・ 矢印に沿って
- ・ 手本を見ながら
- ・ 写真を見せて
- ・ 絵を見ながら
- ・ 手順表を見せながら
- ・ 指をさすと
- ・ ○を書いておくと など

【言語的援助】

- ・ まねをして言う
- ・ 最初の音を言う
- ・ 言葉の指示に従う
- ・ 最初にモデルの発音を示す
- ・ 「次には何するの？」とたずねる

【その他の援助】

- ・ マス目のある用紙を使って
- ・ パソコンを使って
- ・ 計算機を使って
- ・ 小グループの活動において
- ・ 一対一でのかかわりの中で
- ・ 注意が拡散しないようなパーテーションの中で など



★どの程度 上手に★

評価可能な達成基準を設定しましょう。可能であれば、回数や時間、距離など数値化できるといいでしょう。

- ・ 5 回中 3 回できる
- ・ 20 分間続けて行う
- ・ 10メートル運ぶことができる
- ・ 2分以内でできる など

(4) 指導計画(具体的な手だて)

- 短期目標が具体的に決まったら、次は目標達成に向けて、それをサポートする手だてを考えます。手がかりとしては、先の「短期目標に含まれる **どんな条件のもとで**」の項目が参考になります。
- また、その援助や支援は「いつ」「どこで」「いつまで」「誰が」「どうやって」行うのかの計画を明確にしておくことが大切です。

(5) 指導の展開(日々の記録・評価)

- 個別の指導計画にもとづいて実際の指導に入ります。いわば個別の指導計画というシナリオをもとに指導の本番に挑むようなものです。

指導の展開でのポイント

- ① 集中時間への配慮を行う
- ② 無理のない課題配分にする
- ③ 抵抗感、二次的障害への配慮を行う
- ④ 動機付けを高める工夫をする
- ⑤ 有能感、達成感を味わえる工夫をする



指導の際の一般的な配慮

特別な教育的ニーズのある子どもたちへの支援を考える際、何か特別なことをしなければならないのではないか・・・と思いがちです。確かに特別な指導・支援・配慮がときには必要です。しかし、それがすべてではありません。日々、行われている一般的な指導配慮でも十分に効果は見られます。これからあげる指導の際の配慮は、決して特別なものではありません。すぐにでも実践できる内容です。

● 能動的な学習

- ・子どもが自分から積極的にかかわっていくことができるような課題を取り入れる
- ・子どもに選択させる場面を指導・課題の中で作る



例：取り組むプリントのバリエーション（難易度別、問題数別、認知スタイル別…）

● スモールステップ

- ・課題を（子どもに応じた適切な）段階に細分化し、着実にクリアできるようにする。



※ 難しすぎても、簡単すぎても適当ではありません。実態に応じた課題を用意しましょう。

● 即時フィードバック

- ・子どもが行ったことに対し、即座に評価を返す→ 適切な自己評価の支援につながる

言葉・サイン・シールなど

↓
自己のふりかえり

● 繰り返し

- ・子どもが知識やスキルを獲得・安定するまでおこなう
内容は同じでも、提示の仕方を変えるなどの工夫は必要
- ・繰り返すことで、パターン化され見通しがもちやすくなる

● 集中時間の配慮

- ・指導・課題中に、短く、多くの切りかえを入れる



4 5 分間ずっと集中することは難しくても、10～15分ずつ区切ること、切りかえや気持ちの立て直しが可能になり、結果的に4 5 分間と同じ成果をあげることができます。

● 行動の見とおし

- ・その時間内にどういうことをするのか、最初の段階で流れを示しておく
今、どこを行っているのかが、分かるようにしておく



- ・自分が今、何をしているかを確認しながら、取り組むことができます。
- ・見通しが分からないことからくる不安が解消されます。
- ・どこまでがんばればいいのか明確になるため、注意が持続しやすくなります。

※ 1 時間の内容、1 日のスケジュールなど、いつでも確認できるようにしておくといでしょう

(5) 評価

【総合的な評価のポイント】

- ① 目標や達成度を適切に評価する
- ② 指導内容や方法を評価する
- ③ 来学期・次年度の計画を作成する
- ④ 保護者への報告・説明を行う（通信票とのリンク）



評価するのは子どもに対してのみではありません。子どもの目標達成のために用意した、こちらの**手だて、支援についても評価**することが重要です。個別の指導計画の一番の主演は、子どもでありその保護者です。保護者にはもちろんですが、子どもとも、評価結果については話したいものです。そのためにも、目標を立てる段階から、わかりやすい言葉で立てておくことが重要です。